

殘花聚園 (六)

(日本幼児教育史資料)

東京女子高等師範學校教授

石川謙

五、教子報(一)

中江藤樹は通俗教育子供教育に就いて、親切な意見を出した最も早い先覺者の一人である。寛永十八年に『翁問答』を綴つたが、此の書の中にも既に子供教育に關する興味多い意見の數々が含まれてゐた。藤樹は、然しまた、此の書を世に公にする考へがなかつたのであつたが、いつの間にか轉寫の一本が洩れて、書肆の手に入り出版されてしまつた。そこで此の未定稿の『翁問答』を回收して絶板にする代償として、『鑑草』(六卷)を與へたのである。『鑑草』は支那の書物を原典として、その主意に隨つて女子教訓を説いたものである。その中の一卷(鑑草卷四)に「教子報」さいふのがあつて、子供教育に關して詳しい意見を述べてゐる。ここに紹介しようとするのは、その『鑑草』の一節である。初めに先づ最も大切だと思はれる原理の部分をも四項に分けて、原文のまゝに引用する。第一項第二項は教育の必要を解き、

第三項は子供教育の原理を方法を述べ、第四項は成人教育の要領を論じたものである。

「教子は子に道ををしへて、その明德佛性を明らかにさせる事なり。子の明德明らかれば、生ては忠養のむくひをうけ、死しては生天の福ひをうく。いかにかなれば、子の明德あきらかなればかならず孝行誠あるゆへに、たゞひその子の福分うすくして貧賤なりさいへぎも、その孝養まめやかにして、親のこゝろ安樂なるものなり。子の明德くれば孝心まこみなきゆへに、たゞひその子の福分あつくして富貴なりさいへぎも、孝養まめやかならざれば、親のこゝろよろこび安するところなし。さてまた子の明德明らかれば、當來生天の福ひをうくる事、一子出家すれば九族天に生ずさいへる理なり。出家云は髪をそり衣を墨にそむるを云にはあらず、明德

佛性を明らかにして、世間の苦しびをまぬかれいづるを出家しゆつげとも云、出世間しゆつせけんとも云なり。其子の明德めいとくくらしくして、徒たに佛施僧の孝養かうやうをのみいさなむばかりにては、生天の福ふくひをうる事あたはず。斯かあれば、現世げんせい後生ごせいともに孝養の誠まことをうくる事は、子の明德めいとくを明らかにするより外ほかはなし。本来親もとよりおやの子こにをしゆるは、むくひをのぞむころにあらずさいへさも、此理このことりをよくわきまへて、教をまへをばげますころを知しべし。」

二

「貴たつとせも賤せいやいも、智ちあるも、愚おろかなるも、生いきこし生せいる人ひと、その子こを愛あいせざるはなし。子こを愛あいするときは、かならずその子こに寶たからをあたへんことをねがはざるはなし。しかはあれざ、天下第一てんかだいの寶たからのある事をわきまへざる故ゆへに、徒たに世間よのたからをあたへんこのみねがひて、生命せいめいのたからをあたへん願ねがふこゝろなし。それ天下の寶たから二つあり。人々ひと々の心の中に明德めいとくと名なづけたる無價むげの寶たからあり。これを性命せいめいのたからと云、天下第一てんかだいの寶たからなり。いかんこなれば、この寶たからをよくたもちぬれば、その心常つねにたのしび、何事なにごとも皆心みなこころにまかせ、世間の寶たからも福分ふくぶんにたがひてあつまり、子孫しそんもこれによつて繁昌はんじやうし、當來たうらいかならず天てんに生せいず。今生こんじやう後生ごせいの安樂あんらく、思おもひのまゝなる功德くどくある如意寶珠にようほうしゆなれば、天下第一てんかだいの寶たからとす。金銀きんぎん珠玉しゆぎよく、天子諸候てんししよこうの位ゐを

世間の寶たからと云、天下第二てんかだいのたからなり。いかんこなれば、明德めいとく明らかなる人これをうれば、その福ふくひめでたく、天下の人皆みなそのめぐみにうるほへり。明德めいとくくらしくして是これをうれば、その身の苦しびと成なり、或あるは身をころし國くにをうしなふ災わざひひこれよりおこれり。桀けつ紂しゆうは天子の富貴ふうきをうけられぬれ共、明德めいとくくらきゆへに、其身そのみころされ國くにを失うしなひて、田夫野人でんふやじんの福ふくひにもをされり。これは用もちる人のあやまりにして此寶このたからのこがはあらずされども、本来ほんらい寶たからの功德くどくをされるゆへなり。しかのみならず世間よ萬用まんようの重寶じゆうほうのみにして、出世間しゆつせけんの重寶じゆうほうとす。彼かれと云是これと云、如意寶珠にいうしゆじゆの明德めいとくには道みちに劣おとれる寶たからなれば、天下第二てんかだいの寶たからと云なり。其下そのう如意寶珠にいうしゆじゆの明德めいとくは人々ひと々具足ぐそくの物なれば、上天てんじやうより下しも庶人しよじんにいたり、上かみ聖人せいじんより下しも凡夫ぼんぷにいたるまで、もさむればうる物なり。世間の寶たからは天命てんめいの福分ふくぶんありて、人ひとごに得える事あたはず。その福分ふくぶんなければ、夜目よめにむねをこがし東奔西走とうほんせいそうしてもさむるさいへさもその甲斐かひなし。しかるゆへに千金せんぎんのゆづりを受うて程ほどなく貧窮ひんきゆうにくるしみ、一錢せんのゆづりをうけざる孤ひとりも家いへを興おこしさみさかへぬるためし、眼前がんぜんに明白めいはくなり。寶たからの勝劣しょうりやくを求もとむればかならず得える。さもさめても得える事あたはざるこの理ことりをよく考かんがへて、天下第一てんかだいの寶たからをゆづらん事、子こを愛あいするの至極しごくなるべきにや。」

「子こををしゆるに、幼少ちゆうせうミ成人せいじんミの差別しやべつあり。幼少ちゆうせうの時に
は、父母ちちは、めのこなぎの心行しんぎやうを教をの根本こんぽんミす。さて其子そのこ
の悪念あくねんをひきうごかし、悪あくにならはざるやうに、用心ようじん第
一いちなり。童部わらべわざ、だはぶれでこなぎをば、その子そのこの心
にまかせてあながちにいましめ制せいすべからず。いかんこ
なればこれらのわざは年ねんたけぬればをのづからなるも
のなり。子こにをしゆるミ云事うんじをあさく心こ得とくたる人ひとは、心
のをしへある事ことをわきまへずして、幼少ちゆうせうの時ときより成人せいじんの
ものふるまひをさせんこいましめぬるによつてその心
すくみ氣屈くつしていなものになるものなり。かくのごここ
なるを見て、幼少ちゆうせうの時ときには教をへ戒むる事こと悪あくしこ心こ得とく寵愛てうあい
におぼれ、何事なにことをもその子そのこの氣隨きずいにまかせて佚樂いつらくにふけ
るやうにもてなし、ものいひつ立たふるまいなぎのいやしく
そこつにして、その心こころ放埒ほうらちに習をも戒いめ制する事な
し。これ皆みな子こをそだつるあやまりなり。これをかつみて、
童わらべわざ、たはぶれなぎをばその子そのこのわざにまかせ、心こ
悪あくに習をば能教よくをへいましむべし。そのをしへやうは、父
母ちちめのこなぎの心こころ得とくにて、常々たうたうのざれごこにも用心ようじんある
事ことなり。世間せけんの人ひと此理このことりをわきまへざるによつて、その
子この我満がまんにして身みがまへなるわざあれば、利根りこんなりこよ
ろこびほめて、いよくく習ひしむやうにもてなし、或あるは

兄弟きやうだいなみ居ゐぬるこきは、かれは我子わがこ、是は我子わがこにあらず
なぎたはぶれて、其子そのこの争あらそひねたむ心こころをひきうごかし、
或あるはいみじき食物しょく衣い服ふくなぎに逢あはれたまへんあたへま
じきなぎたはぶれて、その子そのこの貪欲どんよくの根ねを引うごかす。
或あるはその子そのこ人ひとに對たいし心にさかふ事ことありてなきさけぶ時
は、その子そのこに道みち理りを付て、かれをうたん彼かれをしからんな
さいひすかして、その子そのこのうらみをむくひ、人ひとをうちらん
たたかふ狼戾らんれいの根ねを引うごかす。あるひはむざミ誑たがか
して、人ひとを欺あざむく機變きへんの根ねを引うごかし、或あるはむざミおそ
ろしきつくりごこをいひたはぶれ、おごしておびへおそ
るく臆病おくびやうの根ねを引うごかす。かくのごここ覺おぼへずしらず
その子そのこの悪念あくねんを引ひうごかし、ゆくくく明徳めいとくをくらます習
ひをつくる事、あげてかぞへがたし。此理このことりをよく心こ得とく
て、貪欲どんよくの習なひ、我満がまんの習なひ、狼戾らんれいの習なひ、争あらそひ勝習かつ
ひ、人ひとをあなぎりいやしむ習ひなぎの、しみつかざるや
うに用心ようじん第一だいいちにし、かりそめのたはぶれにも、父母ちち兄あにみお老
たる人ひとに、みやづかへのわざを教へ、つこめて謙徳けんとくをや
しなふべし。」

四

「成人せいじんしての教をには明徳めいとく明めらかなる君子くんしをもこめ、師匠ししやうミ
して儒道じゆどうの心學しんがくををしへ、ひたすらに、明徳めいとくを明らかに

らうと思つて、森の中へ入つて行きました。するど、見た
 こゝもないやうな、美しいお姉さまがギートントンと機を
 織つていらつしやいました。そして花子さんの方を向いて、
 にこ／＼しながら

「花子さん、今日の遠足に、あなたは、ごんな洋服で行き
 ますか。赤いのがいゝですか、青いのがいゝですか」

とおつしやいました。

花子さんは、びつくりして、眼をバチクリさせてるま
 じ、またその方は、

「これは、花子さんのお洋服にしようと思つて織つてゐる
 のですよ」

とおつしやいました。そして機からお取りになるご、縫
 はないのにそれがちやんご洋服に仕立てゝありました。

そこで花子さんは、青い洋服を着せていただいて、よろ
 こんで遠足に出かけました。

それから、この洋服は、ごんなに引つぱつても、釘にひ
 つかけても、少しも破れませんでした。ほんごに、つよく
 てかはいゝ洋服です。

(一九頁より)

する工夫を勵し、才智藝能なごは、その生得の器用に
 したがつてをしへ成べし。或人の曰、三教皆明德を明か
 にする教なるに、儒道の心學ごのみ承はれば、かたむ
 きなるやうにきこえ候は如何。曰、もごより三教ごも
 に、明德を明らかにするをしへなれごも、仙佛の二教は
 その法世間に便り悪く、その上工夫取入がたき所あり。
 儒教は世間の日用にたよりよく、その工夫取入きはめて
 やすきゆへに、世間通用のためなれば、儒道の心學ごの
 み論するなり。ひがめる私言にはあらず。」

(昭和十四年五月十四日)